

# 連綿体仮名活字

毛筆手書きの再現を目指す活字

小宮山博史

## 平野活版の盛況、 本木昌造の死

◎明治八（一八七五）年九月三日、活字製法と近代印刷術を上海から導入した本木昌造は、長崎で五二歳の波瀾万丈の生涯を終えました。本木昌造の死去から二日後の九月五日、東京日日新聞第一一五号は追悼記事を載せました。すこし長いのですが平野活版の盛況もわかりますので全文を引用してみます。原文は句読点がなく読みにくいので、すこし切ってみました。漢字は新字体に直してあります。

長崎の本木昌造は一昨三日の朝六時ごろ死去せりとの電報を得たり 嗚呼をしむべし 未だ老人の仲間に入るほどの齢にもあらぬに 何ゆゑ早く此世を見すてたるならん 抑々此人は我々同業の新聞紙屋そのほか活字版を以て業とする者なら 厚くお礼を申さねば成らぬ筋がある 如何となれば此人は我が日本に於て西洋の法に倣ひ鉛製の活字版

を開き始めたる元祖と云ふべし 今を去る十四年前文久壬戌のとし長崎に於て社を結び  
 電力活字の業を起したれども 時運いまだ至らず世人これを用ゆる者なきより月々五百  
 余金の損と成り 数年の間にて既に三万両余を失なふに至れども 昌造もとより剛毅な  
 る性質にて能く久しきに堪ふるを以て更に其志ざしを折かず 多くの艱難を忍び益々精  
 神を凝し必ず日本に此業を盛んならしめんと勉強せし功ありて 八九年の後に至り漸や  
 く世に行わるるに至りしかば 猶も勉強して国家の文運を助けんと 明治三年の秋その  
 社中の一人たる平野富二を択んで東京に出店せしめ 築地二丁目二十番地に活字製造所  
 を取り立て盛に是を製し出したる折から 文明開化の盛運と成りて新聞紙屋は一雨一雨  
 と殖る 彼所にも此所にも活字の印行場始まる 茶や料理屋の引札から芝居の番付まで  
 みな活字版を用ゆる世の中と成り 人々も便利を喜び新聞紙屋も渡世ができ 製する  
 方でもお金が儲かる様に成たる元はと本木に返つて見れば 昌造先生が（引用者註、「本木昌  
 わせをし  
 ています」多年辛苦を厭はず尽して仕揚られたる御陰にあらずや 故に我々の同業は此人に  
 対して厚くお礼を申すべき筋ありと云ふとも決して無理には非ざるべし 今そのお礼か  
 たがた弔悼をも兼て築地の活版製造所へ往て見ましたが 成るほど感心にいろいろの字  
 母が出来て居りました 横文字は何の様なのでもみな西洋の形写して 花文字から粹に  
 用ゆる唐草まで揃ております カタカナひらがなは申すに及ばず漢字は明朝風も楷書も  
 大小いろいろありて 此節できかかりて居るのは極々ちいさい漢字と二字つづけ三字続  
 の平かなだと申す事 是が出来たらば猶また便利に成りませう 然して大壮おほきな製  
 造場を新しく立ててありましたから中へ入つて見ましたが 大勢の職人が蒸気の仕掛で  
 仕事をして居りましたが 活字ばかりでは無い銅鉄の細工は何でも出来ると見えます  
 夫もその筈この本木昌造と云ふ人は二十年前に長崎の製鉄所を開いた人で五座ります

この見学記事で興味深いのは、次の三点でしようか。

- 一、「明朝風」という表現
- 二、小さいサイズの漢字活字の制作
- 三、二字、三字続きの平がな活字の制作

「明朝風」という表現から、この当時平野活版内では「明朝体」というはっきりした書体名称を使っていなかったかもしれない。明治五（一八七二）年の崎陽新塾製造活字目録は書体名を表記せず、ただ「活字」としてありました。書体名称は他書体との差別化をはかるために必要なものですが、差別化する書体がなければ「活字」だけでよく、べつに名称を付ける必要はありません。明朝体という名称が必要になってくるのは、本木の追悼記事が掲載された二〇日後の九月二五日に開業した弘道軒が楷書活字を製造販売することになってからでしょう。この楷書活字は後に弘道軒清朝体せいらうたいとよばれる書体です。

小さいサイズの漢字活字とは、たぶん六号（角寸法約二・八ミリ）だと思えます。上海から導入した六号を七号とし、五号と七号の間に三号の半分の六号活字を作ること、大きさの段階を滑らかにすることができます。明治一九年九月に刊行された築地活版の六号活字の見本帳には、漢字が八八三四字収容されています。★四五七明治四一年三月の六号見本帳が約九千字です。この程度が六号一書体の漢字数といってもいいかもしれません。ほぼ五号活字と同じ漢字数ですので、このサイズの使用頻度が高いことがわかります。





# 連綿体 平かな活字

☆註五五……きりしたん版 天正遣欧使節が持ち帰ったヨーロッパ製の活版印刷機と金属活字で、島原半島加津佐、天草、長崎、京都で聖書や語学に関する書籍を印刷。刊行。稼働期間は天正一九（一九一）年から慶長一六（一六一）年までの二〇年間で、刊行書は三〇種を超える。残存点数は極端に少なく、日本が所蔵しているものの多くは重要文化財の指定を受けている。慶長一七年のきりしたん追放により、印刷機を含む機材は国外に送られ、その後の足取りはわからない。日本に西洋式活版印刷術が再び入ってくるのは二五七年後の明治二（一八六九）年である。本木昌造の招聘によるウイリアム・キャンブルの講習がそれである。

☆註五六……嵯峨本 角倉素庵（すみのくろそあん）と本阿弥光悦（ほんあみこうえつ）によって木活字を使って印刷された刊本。慶長年間の後半に作られたもので、刊行地の名前をどって嵯峨本という。また開版者の名前をどって角倉本とも光悦本ともいう。もともと早く刊行されたのは『伊勢物語』で慶長一三（一六〇八）年である。用紙は豪華で美しく、造本も見事である。木活字は単体活字のほかに二字三字の平かな連字活字を使い、挿絵とあいまって日本で刊行されたものもつと優れた書籍といえる。連字活字による印刷はきりしたん版の影響があると考える研究者もいる。嵯峨本といわれるものに『徒然草』『方丈記』『新古今和歌集』『百人一首』『三十六歌仙』『二十四孝』などがあり、光悦本と呼ばれるものに『謡曲百番』がある。

★國五八……『印刷雜誌』第一巻第六号掲載の東京築地活版製造所広告 竹口芳五郎彫刻の楷書と連綿体活字。【二一九頁参照】

# 平野活版の つづきがな

◎そしてもっとも興味を引くのは続き字の平かなの記事です。明治八年に生きている人々の日常の文字生活は毛筆手書きの連綿体（れんめんたい、続け字の）が基本です。連綿体に慣れた人々にとって一字づつの活字で組まれた文章を見たり、読んだりするには戸惑いと違和感があつたと思われまふ。活字制作の現場では自分達が慣れ親しんでいる連綿体を、活字で再現できないかと模索するのは自然なことでしょう。明治二四年七月刊の『印刷雜誌』第一巻第六号の一九頁は東京築地活版製造所のカラー広告ですが、そこには四号の美しい楷書漢字活字と流麗な連綿体平かな活字を使った漢字仮名交り文の見本が掲載されています。この連綿体平かな活字は人々の要求を十分に満たしたと思われるほどのできばえです。頁の左端には六号活字で「活字種版師竹口芳五郎」「印刷技手坂本虎馬」と組まれています。連載第七回で紹介した築地書体の基礎を作り、書体の改良に生涯をかけた種字彫り師竹口芳五郎が生み出した書体です。これは単体の活字をつなげていく方法ではなく、最初から二字連字、三字連字で作ってありますので、金属活字のきりしたん版や木活字の嵯峨本などと同じやりかたです。この広告の組見本には、単体活字は「に」の変体仮名「尔」一字のみが使われているだけで、ほかにもどのような単体文字があつたのか残念ながらわかりません。大冊『聚珍録』を三省堂から刊行した府川充男氏に尋ねたところ、この連綿体活字を使った実際の印刷物は見たことがないとおっしゃってられます。もしかするとこの広告のためにわざわざ作った可能性もあるかもしれません。

◎東京日日新聞の記事にある二字、三字続きの平かなは、この『印刷雜誌』の広告を飾った連綿体平かな活字ではありませんでした。では東京日日新聞の記者が見た続け字の平かなはどのようなものであつたのかと思つて探しましたところ、その答えになりそうなものがあり

印刷雑誌誌



活字種版師 竹口芳五郎  
印刷技手 坂本虎馬

日本東京市京橋區築地貳丁目拾七番地東京築地活版製活字所 印行

十九

ました。

明治一一年三月刊の平野活版製造所『活版総数目録全』、これは四号活字の総数見本帳で、漢字はロンドン伝道会のサミュエル・ダイアによって父型彫刻が開始され、ダイアの死後北米長老会印刷所華花聖経書房から転じたリチャード・コールによって完成を見たものです。これに組み合わせる仮名は長崎の池原香穉いけはらかわかが版下を書いたとされる、三谷幸吉のいう「和様」ですが、その他に「つづきかな」というのが掲載されています。これは甲之部、乙之部、丙之部、丁之部の四種で、

- 甲之部 連続しない単体の文字 一六六字
- 乙之部 語の頭に使い次の文字につながる 一六七字
- 丙之部 上下ともにつながる文字 一七五字
- 丁之部 語の最後に使う文字で、前の文字とつながる 一七二字

となります。脈絡は字面の左右中央下、あるいは左右中央の上下、あるいは左右中央の上になり、この脈絡が上手に接続して連綿体のように見える仕掛けになっています。つづきがないには変体仮名も含まれていますが、連綿風に構成するには六八〇字が必要です。最少単位で最大効果をあげるのが活字の大きな役割ですが、四種類の平がなをどう組み合わせる文章を作っていくのかとなると、組版担当者の研ぎすまされた感覚が要求されますし、組版時に左右にブレないように正確に組まなくてはなりません。その前の種字彫刻のときに脈絡の位置をいつも同じところに設定しなければなりませんし、つながった脈絡が不自然でないような作り方もしなければなりませんから、これはけっこう大変な作業ですね。活字の字種も普通の四倍必要となり、その上に組版でも苦勞するとなれば使い勝手は悪く、評判をよんだとし



★図五九……青山進行堂『活版略見本』明治四一年頃の総合見本帳に収録の「四号続き仮名」。ここには単体の活字見本はなく下につながるもの（上）、上下につながるもの（中）、上につながるもの（下）の三種である。  
【三三三頁参照】

でも広く使われるということはずかしいかもしれません。★図五九

活字は一字・一字形を基本とします。おなじ字はどこで使われても同じ字形であることで、その文字の字形が本来持っている個性を薄める効果があり、かつ大量に投下されることでやがて個性は意識されなくなり、結果としてどのような内容の文章にも対応できるようになります。しかし四種類の字形を使って作る平野活版の連綿体平がなは、手書きの再現を目指すものですから、組み合わせかたによっていろいろな表情を見せるのではないかと思うのです。とすれば、活字が文章内容を規制する恐れもありうるわけで、タイポグラフィの面から見れば良いことではない、と考えるのは考え過ぎでしょうね。ただ単に毛筆手書きの活字による再現を目指したと考えるほうがいいのかもかもしれません。

私はこの連綿体平がな活字を使った印刷物の現物を残念ながら見ていないのですが、『幕末明治耶蘇教史研究』の口絵には明治八（一八七五）年ネーサン・ブラウン（Nathan Brown）の横浜バイブルプレスが刊行した『馬可伝福音書』の印影があり、たしかに四号の連綿体平がな活字で組まれています。冒頭に紹介した東京日日新聞の記者が見た「二字つづけ三字続の平かな」がこれです。ですからこの本は九月五日以降に刊行されたことがわかります。ネーサン・ブラウンがバプテスト教会宣教師として横浜に来たのは明治六年二月七日で、六五歳のときです。日本はまだキリスト教禁教でしたが、禁制の高札は来日後一七日目の二月二四日に撤廃されました。『馬可伝福音書』の扉には「よこはま やま 六十七ばん ぞうはん」とあります。ここはブラウンの自宅ですが、横浜山手の丘を東西に走る山手本通りの南側で、一般公開されている洋館ベリックホールの前あたりでしょうか。連綿体平がな活字を使ったネーサン・ブラウン版は、明治九年の『馬太伝福音書』、明治一〇年の『留可伝福音書』、明治一二年の『與波子亭無』、『新約全書』などがあります。★図六〇 できるだけ平易な聖書を作るために本文を平がなにしていくのでしよう。ネーサン・ブラウンの関係以外に四号連綿体平が

★図六〇……平野活版製の連綿体平がな活字を使った、一八七九年横浜バイブルプレス刊の『新約全書』

【三三三頁参照】

四 號 續 假 名

(上)

のひろはりそはろ  
 あはろはりそはろ  
 ちりそはりそはろ  
 かわりそはりそはろ  
 たふあはりそはろ  
 つひはりそはろ  
 ああらしそはろ  
 むのひはりそはろ  
 やまはりそはろ  
 がけはりそはろ  
 ちあはりそはろ  
 ちあはりそはろ  
 ちあはりそはろ  
 ちあはりそはろ

(中)

のひろはりそはろ  
 あはろはりそはろ  
 ちりそはりそはろ  
 かわりそはりそはろ  
 たふあはりそはろ  
 つひはりそはりそはろ  
 ああらしそはりそはろ  
 むのひはりそはりそはろ  
 やまはりそはりそはろ  
 がけはりそはりそはろ  
 ちあはりそはりそはろ  
 ちあはりそはりそはろ  
 ちあはりそはりそはろ

(下)

のひろはりそはろ  
 あはろはりそはろ  
 ちりそはりそはろ  
 かわりそはりそはろ  
 たふあはりそはろ  
 つひはりそはりそはろ  
 ああらしそはりそはろ  
 むのひはりそはりそはろ  
 やまはりそはりそはろ  
 がけはりそはりそはろ  
 ちあはりそはりそはろ  
 ちあはりそはりそはろ  
 ちあはりそはりそはろ

な活字を使った例はほとんどないようです。  
 毛筆手書きを再現する目的で、連綿体の平かな活字を初めて制作したのは、残念ながら日  
 本ではありません。それは平野活版が開発するずっと以前のことです。



# 連綿体 平かな活字を 最初に開発したのは ウイーンの 王立印刷局

◎一八四七（弘化四）年、柳亭種彦りゅうていしゅんたけひこの著作が突然ウイーンで刊行されました。もちろん日本語での刊行です。印刷刊行はウイーンの王立印刷局 K.K.Hof- und Staatsdruckerei in Wien です。ウイーン版の表題は *Sechs Wandschirme in Gestalten der Vergänglichlichen Welt* です。戯作者柳亭種彦けいせくしや、本名は高屋彦四郎知久で天明三（一七八三）年の生れといえます。家は二百俵取りの旗本です。学究肌で蔵書家としても知られています。伊狩章は自著『柳亭種彦』の中で次のように書いています。

彼は評判の蔵書家であると同時に、無類の愛書家だった。糸が切れ、ぼろぼろになった古書を自分でとじ直し、さらに裏うちまでしたという。本を愛し、古書を探索することが種彦の唯一の道楽だった。角田竹冷によれば、種彦は袴羽織に小刀をおびて、古書肆朝倉屋の店へ座りこみ、古本の中で一日暮すこともあったという。ほかに嗜好のない彼にとどって、古本あさがり最も楽しいひと時だったのであろう。

東洋学者アウグスト・フィッツマイヤー (August Pützmaier) の序文では、原著は著者柳亭種彦、画は歌川豊国、「文政一八年」（文政は一三年までで、一八年はありません）に江戸で刊行された木版印刷物で、ウイーン王立印刷所が収蔵しているものを、*beweglichen Typen gedruckt* （直訳すれば可動活字印刷です。英語の Movable Type に相当します。） で覆刻したとあります。★図六一

王立印刷所収蔵のこの本は、文政四（一八二二）年永寿堂が刊行した柳亭種彦の『浮世形六枚屏風』（うきよがたむろくまいびょうぶ）で、種彦の代表作の一つとされています。「此書ほんに無い物は」からはじまる序文はこの本の特徴を示していますが、伊狩章のかいつまんだ文章がわかりやすいので、以下に引用します。

★図六一……一八四七年ウイーン版『浮世形六枚屏風』連綿体活字での覆刻版。 [二三六・三三八頁参照]

★図六二……文政四（一八二二）年永寿堂版『浮世形六枚屏風』木版印刷による刊本。 [二三七・三三九頁参照]

(今までのこの手の本の特徴である) お家騒動・敵討・怪異譚のたぐいと異なり、きわめて尋常の趣向であることを述べ、それと関連して、人と屏風は曲がらねば役立たぬなどというが、不正直ではなお世渡りができぬ。この作中の人物はみな誠実によって生きつらぬいたし、この屏風もまっすぐのまままで立つ新形である、とすこし勸懲の意をつけ加えておく、と述べている。

『浮世形六枚屏風』は近松門左衛門の『心中刃やらばは氷の朔日つらたち』を改作したものだそうです。近松のものは最後は心中で終わりますが、種彦は心中を決心した大阪中之島の米商人佐吉と芸者小松が、佐吉の母親の手紙に救われめでたしめでたしで終わらせませす。二人が心中を決意する場面は、近松の名作『曾根崎心中』のお初徳兵衛の道行きを暗示させる作りになっているとのことです。

覆刻版と原版を比べてみると、原版の雰囲気壊さず、それも金属活字を使って忠実に再現しようとしていることがわかれると思います。この本を覆刻するために作った連綿体活字について、フィッツマイヤーは「日本以外でいまだかつて作られたことのない日本語の活字」といっています。そしてこの活字を開発した局長アロイス・アウエル (Aloys Auer) を賞賛しています。原版は手書きの本文と絵を版下にして木版に彫り、バレン刷りをしたいわゆる整版本です。元は手書きですから文字の字形は同じ字種でもすべて違います。そのような刊本をしかも活字で、面影を変えずに再現しようとしたとき、活字の字種を増やすばかりありません。一字・一字種という活字の原則は通用しなくなり、字形と活字幅(縦組みですので上下の幅です)を左左右は同じ寸法寸法ですを変化させなくてはなりません。ではどのくらいの活字を用意したのでしょうか。









二枚

一の世に...  
 二の世に...  
 三の世に...  
 四の世に...  
 五の世に...  
 六の世に...  
 七の世に...  
 八の世に...  
 九の世に...  
 十の世に...  
 十一の世に...  
 十二の世に...  
 十三の世に...  
 十四の世に...  
 十五の世に...  
 十六の世に...  
 十七の世に...  
 十八の世に...  
 十九の世に...  
 二十の世に...  
 二十一の世に...  
 二十二の世に...  
 二十三の世に...  
 二十四の世に...  
 二十五の世に...  
 二十六の世に...  
 二十七の世に...  
 二十八の世に...  
 二十九の世に...  
 三十の世に...  
 三十一の世に...  
 三十二の世に...  
 三十三の世に...  
 三十四の世に...  
 三十五の世に...  
 三十六の世に...  
 三十七の世に...  
 三十八の世に...  
 三十九の世に...  
 四十の世に...  
 四十一の世に...  
 四十二の世に...  
 四十三の世に...  
 四十四の世に...  
 四十五の世に...  
 四十六の世に...  
 四十七の世に...  
 四十八の世に...  
 四十九の世に...  
 五十の世に...

二十...  
 二十一...  
 二十二...  
 二十三...  
 二十四...  
 二十五...  
 二十六...  
 二十七...  
 二十八...  
 二十九...  
 三十...  
 三十一...  
 三十二...  
 三十三...  
 三十四...  
 三十五...  
 三十六...  
 三十七...  
 三十八...  
 三十九...  
 四十...  
 四十一...  
 四十二...  
 四十三...  
 四十四...  
 四十五...  
 四十六...  
 四十七...  
 四十八...  
 四十九...  
 五十...



★図六一二  
 文政四(一八二二)年  
 永寿堂版『浮世形六枚屏風』  
 木版印刷による刊本

# 覆刻のために 活字はどのくらい 用意されたのか

○ウィーン版が刊行された三〇年後の一八七六（明治九）年ですが、ウィーン王立印刷局は自局が所有する世界の一二〇言語の文字活字を収録した総合見本帳 *Alfabeto des gesammten Erdkreises* を刊行します。世界の全民族のアルファベットとでも訳すのでしょうか。手持ちの資料は *Zweite Auflage* がありますので第二版ですが、初版がいつ出たかはわかりません。この中に『浮世形六枚屏風』の覆刻のために作られた活字の全字種と思われるものが JAPANISCH として載っています。それによりますと、

● ひらがな	四八一字		
● 清音・濁音・半濁音	合計三九二字	リガチャー（合字）七九字	約物一〇字
● カタカナ	一五三字		
● 清音・濁音・半濁音	合計一二六字	リガチャー（合字）一四字	記号・約物一三字
● 漢字	二二二字		
● 単体	一九八字	リガチャー（合字）二四字	

★図六三……一八七六年ウィーン王立印刷局総合見本帳 *Alfabeto des gesammten Erdkreises* 一二〇言語活字を収録しており、日本字活字として連綿体活字を掲載。  
〔二四二頁参照〕

です。活字字種の合計は八五六字で、ひらがなの多さが目につきます。JIS X 0213: 2000 では拗促音小字等を含めなければ、ひらがなとカタカナはともに七三字です。原版に近い覆刻を目指したため、ひらがなで六・五倍、カタカナで一・九倍の字種を作ったことになりました。★図六三 ひらがなは同音の変体仮名も含まれますが、「は」は「は・ハ・者・盤」で、一五字形あり、そのうち「ハ」（カタカナではなく漢字「ハ」のひらがな化）が九種あります。次に多い「つ」は「つ・徒・川・津」で一四字形です。カタカナでは「ミ」が七種、「マ」が五種用意されています。カタカナの一字種・一字形が四三字なのをたいして、ひらがなは一字種・一字形はひとつもなく、すべて複数字形で、もっとも少ないものは一字種・三字形です。ひらがなの合字は「し」または「じ」

を含む二字連字がもっとも多く、五八字あります。漢字の合字は「嶋之助」のように人名が多。音ヨは「世・四・夜」があり全部で七種、音ロは「子」五種、「小」三種です。

活字の作り方は平野活版の連綿体平がな活字と同じで、文字の終筆部と始筆部の脈絡を活字幅（左右）のほぼ中央に置いています。これで連続して見えるのです。

歌川豊国の絵は zinko-lithographit 亜鉛版による完全な再現ですが、本文のレイアウトは原版とは違いますし、一頁に入る文字量も違いますが、しかし原版と見まごうばかりの大きさです。

これだけの字種を使いこなして組版をおこなうには、日本語と日本文字に造詣の深い人物がいなければむずかしい。これをみても当時のヨーロッパにおける日本語学の水準の高さと、再現に従事する技術者の高い技術力を知ることができます。そのような下地があっただけで可能な覆刻であつたと思います。

柳亭種彦は文政一二（一八二九）年仙鶴堂から空前絶後のベストセラーとなる『修紫にせむらふき田舎源氏』を出版します。『源氏物語』を翻案したこの本は天保一三（一八四二）年まで続編が書き継がれ、源氏ブームをまき起こします。天保一二年、水野忠邦の天保の改革が始まり、質素儉約令、奢侈品禁令、風俗取締などが次々に打ち出されます。翌一三年には出版統制により絵草紙は風俗を乱すものとして弾圧されました。種彦の『田舎源氏』は大奥の乱れた風紀を描写したものとして糾弾され、筆名柳亭種彦、旗本高屋彦四郎は以降筆を折れと命じられました。そして譴責処分の一ヶ月後の七月一九日、種彦没。

ウィーンで覆刻版が刊行される五年前のことでした。

# JAPANISCH. (FIROKANA.)

(Tertia.)

Die nebenstehenden Ziffern bedeuten den Raum in der Breite der Tipen nach tipometrischen Punkten.

(Da das Japanische in senkrechten [nicht wagerechten] Zeilen geschrieben wird, so zählen die hier angegebenen Zahlen der Breite eigentlich von oben nach unten.)

Zeichen	Werth	Zeichen	Werth	Zeichen	Werth	Zeichen	Werth	Zeichen	Werth	Zeichen	Werth	Zeichen	Werth
あ	6	カ	5 <sup>9</sup> / <sub>16</sub>	キ	5	ミ	5 <sup>7</sup> / <sub>8</sub>	フ	4 <sup>3</sup> / <sub>4</sub>	セ	5 <sup>1</sup> / <sub>4</sub>	テ	6 <sup>7</sup> / <sub>8</sub>
か	4 <sup>15</sup> / <sub>16</sub>	さ	3 <sup>1</sup> / <sub>2</sub>	き	6 <sup>1</sup> / <sub>8</sub>	も	4 <sup>5</sup> / <sub>8</sub>	ハ	4 <sup>1</sup> / <sub>2</sub>	せ	5 <sup>1</sup> / <sub>2</sub>	た	6 <sup>7</sup> / <sub>8</sub>
て	3 <sup>7</sup> / <sub>8</sub>	さ	5 <sup>1</sup> / <sub>2</sub>	ギ	5 <sup>7</sup> / <sub>8</sub>	モ	6 <sup>1</sup> / <sub>8</sub>	ヒ	5 <sup>1</sup> / <sub>4</sub>	せ	5 <sup>7</sup> / <sub>16</sub>	た	6 <sup>1</sup> / <sub>4</sub>
て	5	さ	3 <sup>15</sup> / <sub>16</sub>	ギ	5 <sup>1</sup> / <sub>2</sub>	イ	6 <sup>1</sup> / <sub>2</sub>	フ	6	セ	5 <sup>1</sup> / <sub>4</sub>	た	6 <sup>5</sup> / <sub>8</sub>
て	5 <sup>3</sup> / <sub>16</sub>	さ	5	ギ	6	丨	5 <sup>1</sup> / <sub>4</sub>	フ	6	せ	5 <sup>1</sup> / <sub>4</sub>	た	6 <sup>5</sup> / <sub>8</sub>
て	5 <sup>3</sup> / <sub>8</sub>	さ	4 <sup>1</sup> / <sub>4</sub>	ギ	6 <sup>1</sup> / <sub>8</sub>	丨	3 <sup>7</sup> / <sub>8</sub>	フ	6 <sup>1</sup> / <sub>8</sub>	せ	5 <sup>1</sup> / <sub>4</sub>	た	6 <sup>1</sup> / <sub>2</sub>
て	5	さ	4 <sup>3</sup> / <sub>8</sub>	ギ	6 <sup>1</sup> / <sub>4</sub>	ヨ	4 <sup>1</sup> / <sub>2</sub>	フ	5	せ	4 <sup>1</sup> / <sub>2</sub>	た	6
て	6 <sup>1</sup> / <sub>8</sub>	さ	5 <sup>1</sup> / <sub>2</sub>	ギ	5	ヨ	6 <sup>1</sup> / <sub>8</sub>	フ	5 <sup>1</sup> / <sub>4</sub>	せ	5 <sup>1</sup> / <sub>16</sub>	た	6 <sup>1</sup> / <sub>4</sub>
て	4 <sup>9</sup> / <sub>16</sub>	さ	5 <sup>1</sup> / <sub>2</sub>	ギ	3 <sup>7</sup> / <sub>8</sub>	ヨ	5 <sup>1</sup> / <sub>2</sub>	フ	4 <sup>3</sup> / <sub>8</sub>	せ	5 <sup>1</sup> / <sub>16</sub>	た	6
て	5 <sup>3</sup> / <sub>4</sub>	さ	3 <sup>15</sup> / <sub>16</sub>	ギ	5	丨	6 <sup>1</sup> / <sub>2</sub>	フ	4 <sup>1</sup> / <sub>8</sub>	せ	5 <sup>3</sup> / <sub>8</sub>	た	6 <sup>3</sup> / <sub>16</sub>
て	5	さ	5 <sup>7</sup> / <sub>16</sub>	ギ	4 <sup>1</sup> / <sub>4</sub>	ズ	5 <sup>1</sup> / <sub>4</sub>	フ	4 <sup>15</sup> / <sub>16</sub>	せ	5 <sup>1</sup> / <sub>4</sub>	た	6 <sup>3</sup> / <sub>16</sub>
て	5 <sup>7</sup> / <sub>16</sub>	さ	4 <sup>1</sup> / <sub>2</sub>	ギ	5 <sup>1</sup> / <sub>2</sub>	ズ	5 <sup>15</sup> / <sub>16</sub>	フ	6	せ	6 <sup>1</sup> / <sub>4</sub>	た	6 <sup>5</sup> / <sub>16</sub>
て	6	さ	4 <sup>3</sup> / <sub>8</sub>	ギ	5 <sup>1</sup> / <sub>4</sub>	ズ	6 <sup>1</sup> / <sub>4</sub>	フ	5 <sup>3</sup> / <sub>4</sub>	せ	6 <sup>1</sup> / <sub>2</sub>	た	6 <sup>1</sup> / <sub>4</sub>
て	6 <sup>1</sup> / <sub>8</sub>	さ	5 <sup>7</sup> / <sub>8</sub>	ギ	4 <sup>1</sup> / <sub>2</sub>	ズ	6 <sup>5</sup> / <sub>8</sub>	フ	3 <sup>3</sup> / <sub>4</sub>	せ	3 <sup>15</sup> / <sub>16</sub>	た	6 <sup>1</sup> / <sub>4</sub>
て	3 <sup>15</sup> / <sub>16</sub>	さ	4 <sup>7</sup> / <sub>8</sub>	ギ	4 <sup>1</sup> / <sub>2</sub>	ズ	6 <sup>1</sup> / <sub>4</sub>	フ	7	せ	6	た	6 <sup>1</sup> / <sub>4</sub>
あ	4	さ	6	ギ	4 <sup>9</sup> / <sub>16</sub>	ズ	6 <sup>3</sup> / <sub>8</sub>	フ	4 <sup>15</sup> / <sub>16</sub>	せ	6	た	6 <sup>1</sup> / <sub>4</sub>
あ	6	さ	5 <sup>1</sup> / <sub>2</sub>	ギ	5 <sup>3</sup> / <sub>8</sub>	ズ	6 <sup>3</sup> / <sub>8</sub>	フ	4 <sup>15</sup> / <sub>16</sub>	せ	7 <sup>1</sup> / <sub>4</sub>	た	6 <sup>1</sup> / <sub>4</sub>
あ	4 <sup>3</sup> / <sub>4</sub>	さ	4 <sup>1</sup> / <sub>4</sub>	ギ	5 <sup>7</sup> / <sub>8</sub>	ズ	6 <sup>15</sup> / <sub>16</sub>	フ	6 <sup>1</sup> / <sub>8</sub>	せ	7 <sup>3</sup> / <sub>8</sub>	た	6 <sup>1</sup> / <sub>4</sub>

## LIGATUREN.

Zeichen	Werth	Zeichen	Werth	Zeichen	Werth	Zeichen	Werth	Zeichen	Werth	Zeichen	Werth	Zeichen	Werth					
カ	6 <sup>15</sup> / <sub>16</sub>	fosi	カ	7 <sup>1</sup> / <sub>4</sub>	kawasi	カ	7 <sup>1</sup> / <sub>2</sub>	ク	11 <sup>3</sup> / <sub>16</sub>	kusi	カ	6 <sup>13</sup> / <sub>16</sub>	koto	カ	6 <sup>1</sup> / <sub>8</sub>	カ	7 <sup>1</sup> / <sub>4</sub>	
カ	7 <sup>1</sup> / <sub>2</sub>	fazi	カ	14 <sup>15</sup> / <sub>16</sub>	kasito	カ	7 <sup>1</sup> / <sub>4</sub>	ク	6 <sup>9</sup> / <sub>16</sub>	kuzi	カ	6 <sup>9</sup> / <sub>8</sub>	カ	30 <sup>3</sup> / <sub>4</sub>	カ	7	カ	7
カ	7 <sup>1</sup> / <sub>2</sub>	basi	カ	7	gasi	カ	7 <sup>1</sup> / <sub>2</sub>	ク	7 <sup>3</sup> / <sub>8</sub>	kuru	カ	10 <sup>1</sup> / <sub>2</sub>	カ	7	カ	11 <sup>7</sup> / <sub>8</sub>	カ	11 <sup>7</sup> / <sub>8</sub>
カ	6 <sup>13</sup> / <sub>16</sub>	nisi	カ	7	gasi	カ	13 <sup>3</sup> / <sub>4</sub>	ク	11 <sup>1</sup> / <sub>8</sub>	gusi	カ	6 <sup>7</sup> / <sub>8</sub>	カ	6 <sup>7</sup> / <sub>16</sub>	カ	7	カ	2 <sup>7</sup> / <sub>8</sub>
カ	11 <sup>7</sup> / <sub>16</sub>	fosi	カ	7 <sup>9</sup> / <sub>16</sub>	yosi	カ	6 <sup>1</sup> / <sub>4</sub>	ク	6 <sup>11</sup> / <sub>16</sub>	masi	カ	6 <sup>1</sup> / <sub>8</sub>	カ	6 <sup>1</sup> / <sub>8</sub>	カ	7 <sup>3</sup> / <sub>8</sub>	カ	2 <sup>7</sup> / <sub>8</sub>
カ	6 <sup>1</sup> / <sub>4</sub>	bosi	カ	6 <sup>1</sup> / <sub>4</sub>	yosi	カ	7 <sup>1</sup> / <sub>4</sub>	ク	12	masi	カ	6 <sup>1</sup> / <sub>8</sub>	カ	6 <sup>1</sup> / <sub>8</sub>	カ	12 <sup>3</sup> / <sub>8</sub>	カ	6 <sup>3</sup> / <sub>8</sub>
カ	6 <sup>1</sup> / <sub>4</sub>	dosi	カ	10 <sup>7</sup> / <sub>16</sub>	nazi	カ	7 <sup>1</sup> / <sub>4</sub>	ク	12	masi	カ	5	カ	5	カ	7	カ	6 <sup>3</sup> / <sub>8</sub>
カ	7 <sup>1</sup> / <sub>4</sub>	risi	カ	6 <sup>7</sup> / <sub>16</sub>	tasi	カ	13 <sup>3</sup> / <sub>8</sub>	ク	12	mazi	カ	6 <sup>3</sup> / <sub>8</sub>	カ	6 <sup>3</sup> / <sub>8</sub>	カ	7 <sup>3</sup> / <sub>4</sub>	カ	6 <sup>3</sup> / <sub>8</sub>
カ	7	rusi	カ	6 <sup>7</sup> / <sub>16</sub>	dasi	カ	7 <sup>1</sup> / <sub>16</sub>	ク	12	mazi	カ	6 <sup>3</sup> / <sub>8</sub>	カ	6 <sup>3</sup> / <sub>8</sub>	カ	5 <sup>15</sup> / <sub>16</sub>	カ	2 <sup>7</sup> / <sub>8</sub>
カ	6 <sup>1</sup> / <sub>8</sub>	rubi	カ	7 <sup>1</sup> / <sub>16</sub>	resi	カ	5 <sup>9</sup> / <sub>16</sub>	ク	6 <sup>3</sup> / <sub>8</sub>	gesi	カ	6 <sup>3</sup> / <sub>8</sub>	カ	6 <sup>3</sup> / <sub>8</sub>	カ	7	カ	6 <sup>1</sup> / <sub>8</sub>
カ	8	wowo	カ	6 <sup>1</sup> / <sub>2</sub>	tsudzu	カ	6 <sup>1</sup> / <sub>8</sub>	ク	6 <sup>15</sup> / <sub>16</sub>	fuzi	カ	6 <sup>3</sup> / <sub>8</sub>	カ	6 <sup>3</sup> / <sub>8</sub>	カ	5 <sup>1</sup> / <sub>8</sub>	カ	6 <sup>1</sup> / <sub>8</sub>
カ	7 <sup>3</sup> / <sub>8</sub>	wosi	カ	5 <sup>3</sup> / <sub>4</sub>	dzusi	カ	7 <sup>3</sup> / <sub>4</sub>	ク	6 <sup>9</sup> / <sub>16</sub>	busi	カ	6 <sup>3</sup> / <sub>8</sub>	カ	7	カ	7 <sup>1</sup> / <sub>16</sub>	カ	5 <sup>3</sup> / <sub>4</sub>
カ	10 <sup>3</sup> / <sub>4</sub>	kan	カ	6 <sup>3</sup> / <sub>8</sub>	dzusi	カ	7 <sup>3</sup> / <sub>4</sub>	ク	6 <sup>9</sup> / <sub>16</sub>	koto	カ	6 <sup>1</sup> / <sub>16</sub>	カ	10 <sup>1</sup> / <sub>2</sub>	カ	7	カ	7
カ	5 <sup>1</sup> / <sub>8</sub>	kajesi	カ	6 <sup>3</sup> / <sub>8</sub>	dzusi	カ	7 <sup>1</sup> / <sub>4</sub>	ク	6 <sup>13</sup> / <sub>16</sub>	koto	カ	6 <sup>13</sup> / <sub>16</sub>	カ	7	カ	5 <sup>15</sup> / <sub>16</sub>	カ	2 <sup>1</sup> / <sub>8</sub>
カ	7	kajesi	カ	6 <sup>3</sup> / <sub>8</sub>	dzusi	カ	7 <sup>1</sup> / <sub>4</sub>	ク	6 <sup>13</sup> / <sub>16</sub>	koto	カ	6 <sup>13</sup> / <sub>16</sub>	カ	7	カ	5 <sup>15</sup> / <sub>16</sub>	カ	2 <sup>1</sup> / <sub>8</sub>

## ウィーンの 連綿体活字、 その後

★図六四……一八七四年アドルフホルツハウゼン出版の『使徒行伝』。ウィーン王立印刷局の連綿活字で組んだ、ベッテルハイムの日本語訳聖書。扉と本文、扉の左右の明朝体はロンドン伝道会が作った四号。  
〔二四五・二四六頁参照〕

◎日本伝道を望みながら志を果たせず一八七〇（明治三）年アメリカで没したイギリス人宣教師ベッテルハイム（Bernard Jean Bettelheim）の遺稿が、フィッツマイヤーの助力でウィーンで刊行されます。日本語訳聖書『約翰伝福音書』『路加伝福音書』（一八七三年）、『使徒行伝』（一八七四年）の三冊ですが、印刷出版はウィーンのアドルフホルツハウゼン（Satz. Druck. Holzhausen）★図六四です。この日本語訳聖書を組んでいる活字は『浮世形六枚屏風』を覆刻するために開発された連綿体活字です。ただし聖書を組むためには漢字が足りませんので、「天・神・聖・血・経」などを補刻しています。キリスト教史の川島二郎先生は、平野活版が開発した連綿体活字はこのベッテルハイム聖書に影響された結果だと推測されており、ネーサン・ブラウンの強い意向もあったかもしれません。

昭和四（一九二九）年七月一六日京城大学教授奥平武彦はウィーン市カンドル街一九番地に建つアドルフホルツハウゼンを訪れ、ベッテルハイムの日本語聖書を組んだ活字が残っていることを確認し、「……辞し去らんとしてこれらの活字を譲り受くるを得るかど云へば即座に之に応じ潰した鉛の價として若干少額の値を云つて呉れた……」。このとき奥平武彦が入手した日本語活字は約四〇本といわれています（昭和五三年二月八日付『朝日』「新聞」掲載「最古の和訳聖書」）。奥平は「維納ウィーンの日本活字」（昭和二年二月二五）を執筆し、この連綿体活字を紹介します。

日本語聖書の蒐集家で研究者門脇清はこの文章を読み、この活字を見たいと熱望し、昭和一五年九月二四日中国東北地方への旅行の帰りに京城（今のソウ）に立ち寄って、奥平の自宅を訪ねます。門脇は奥平にウィーン活字の譲渡を嘆願し、応諾されます。

門脇は奥平の持つ半分を譲られました。帰る途中大阪在住の聖書蒐集家上田貞次郎にその半分を贈りました。上田の活字は戦災で失われ、また奥平の活字も行方不明となり、結局門脇の活字だけが生き延びたのです。昭和四六（一九七二）年門脇清の蔵書が山梨英和短期大学（現山梨英和）図書館に寄贈されることになり、ウィーン活字六本が同図書館へ入り、昭和五三

☆註五七……ディドーポイント フランス人フランソワ・ディドー (François Ambrois Didot) によって一七七〇年ごろ確立されたポイント制 問題をなっていたフルニエポイントの精度を改良し、フランス常用のフォント尺ピエ・デュ・ロアの二分の一インチを六ポイントとした。一インチは七十二ポイント、一ポイントは〇・三七五九ミリである。

(二九七八)年三本が関西大学図書館(千里学舎)に寄贈され現在に至りました。今もウィーンにあるアドルフホルツハウゼンには連綿体活字は保存されていないようですので、一八四七年制作の活字は日本にある九本だけが現存する総てでしょう。

両図書館に収蔵されているウィーン活字のサイズは、一ポイントが〇・三七六ミリのディドーポイント☆註五七で作られており、変体仮名二字と二重の繰り返し記号一字の三字が一六ディドーポイントの幅(左右)を持ち、カタカナ六字が一二ディドーポイントの幅(左右)を持っていました。縦組みの日本字は左右幅(横)が活字のサイズを示します。欧文活字は横組み専用ですから上下幅(縦)が活字のサイズです。ウィーン活字の大きさ(上下幅)は、文字固有の大きさの再現を目指すためいろいろのサイズを持たせているようです。

活字幅が二種類あることは組版を複雑にするのではないのでしょうか。カタカナは一二ポイントですから、ひらがなの一六ポイントと組むときには左右に二ポイントを入れるのか、左に四ポイント入れて文字を右に寄せる組版をするのか、今のところわかりません。毛筆手書きを再現する連綿体活字は、その効果を生み出すためには複雑な組版を強いられることと、組版者の美的センスが不可欠なため、組まれた美しさは理解できたとしても使用に二の足を踏む結果となり、長く行われなかったのかもしれない。

- 参考文献・関連書籍
- 『幕末明治耶蘇教史研究』小沢三郎著、亜細亜書房 一九四四年
  - 人物叢書『柳亭種彦』伊狩章著、吉川弘文館 一九八九年新装版
  - 『活字書体の変遷と書体系譜の研究(その一)』武蔵野美術大学平成五年度共同研究報告書 一九九五年
  - 『真贋のはかり』[デジシャンから遺伝(下)まで] 西野嘉章編、東京大学総合研究博物館、二〇〇二年
  - 『欧文活字でタイホグラフィ』欧文印刷研究会編、印刷学会出版部、一九六六年

◎組版仕様

書体=ヒラギン明朝Std W4 (漢字・欧文・アラビア数字)+築地活文舎五号版名(仮名、「日本の活字書体名作精選」より)  
 見出し=サオズ:60級/中見出し=サオズ:32級、字送り:プロポーショナル、行送り:40pt  
 本文=サオズ:16級、字送り:16pt、行送り:30pt、1行:41字詰め・22行  
 頭注=サオズ:10級、字送り:10pt、行送り:13pt、1行:21字詰め・50行  
 ◎発行=大日本スクリーン製造株式会社 ◎デザイン=組版=向井裕一(gypn) (2005.03.29)



